

失語症患者に対する訪問言語聴覚療法の有用性

水谷 圭吾¹⁾ 對馬 ゆりえ¹⁾ 石森 卓矢¹⁾ 風晴 俊之²⁾ 美原 盤³⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 訪問看護ステーショングラーチア
リハビリテーション部門

2) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション科

3) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 神経内科

[目的] 訪問言語聴覚療法(ST)の目的は、言語機能・コミュニケーション能力の向上を図り、生活範囲を拡大することにある。しかし、訪問STの効果についての報告は少ない。そこで今回、訪問STの有用性について検討した。

[取り組み] 対象は、日常生活動作が自立している失語症患者で、介入時、利用している介護保険サービスが訪問STのみの9例とした。言語機能の指標として短縮版WAB失語症検査、生活範囲の指標としてLife Space Assessment(LSA)を介入時、および介入516.2±506.2日後で測定した。短縮版WAB失語症検査、LSAともに有意な向上を認めた($p < 0.05$)。言語機能は長期的な改善が期待できるとされ、今回の検討でも長期的な改善を認めた。また言語機能のみならず生活範囲の拡大も認められ、訪問STの有用性が示された。